

# 中古における「をかし」の意味・用法に関する一考察

黄 龍夏

## 1. はじめに

本研究は、平安時代に入ってから文献に姿を見せる「をかし」の意味・用法を明らかにすることを願うものである。

「をかし」という感情形容詞は時代、文献によって微妙な意味・用法の差(変化)が見える。そこで、本稿では、中古の和文系の文献における多義語「をかし」の意味・用法について考察し、中古の「をかし」の意味・用法は如何なるものであるかを追求したい。

中古の「をかし」に関する従来の研究は、主に「美」・「美意識」・「美的理念語」・「見立て」という観点からその意味、性格などを把握し、記述したものが多く、山崎(1978)と土屋(1976、1979)などがそうである。前者は、『源氏物語』注釈書類の「をかし」の現代語訳を検討し、「をかし」の対象とその意義についていくつかの結論を出しているものの、現代語訳すなわち、辞書の記述のような「をかし」の意味についての言及はない。後者では、『枕草子』の「をかし」をはじめ美的理念語乃至関連する語をとりあげ、その対象、断定か限定という用法の分析から、美的理念語には、①主要美的評価②一般美的評価③美的要素のような段階があると述べている。

岡崎(1938)や森野(1985)などは、「をかし」の意味の変化について通時的に述べられている点で注目されるものの、扱っている作品と用例が限られている。

平澤(1986、1988)は、「をかし」の意味と構造についての本格的な先行研究のように思われる。特に、平澤(1988)では、「情緒性」の意味素性として評価性、主観性、感情性、比較基準、情緒度を立て、『枕草子』の「をかし」における意味領域のうち、「趣がある、風情がある」型に属する用例に限って情緒度別対象を分析している。

さらに現行の国語辞典類の「をかし」の項目では、意味ブランチのずれという問題と共に、「滑稽だ」類・「変だ」類に挙げている「をかし」の用例問題も出てくる。

以上、簡単に「をかし」に関する先行研究を振り返ってみたが、「をかし」の意味・用法、辞書の記述など、未だ十分に説明されていないところも多いと言えよう。

## 2. 「をかし」の用法

ことばの基本的な意味を分析するためには、まずその機能を明確にした上で検討することがのぞましいと考えられる。そこで、対象語の検討に入る前に、まず文中での機能を中心に、「をかし」の用例を連体用法、連用用法、叙述用法のように三用法に分類して考えることにする<sup>1)</sup>。

### 2.1.1 連体用法

「をかし」の被修飾語となるものを国立国語研究所資料集6『分類語彙表』の分類項目に従って、「をかし」の用例を分析・分類した。分析結果を【表1】にして示す。調査対象資料と各々の用例数は【資料】として稿末に示す。

【表1】連体用法における被修飾成分の内容

作品 意味分類	竹取	伊勢	土佐	落窪	宇津	蜻蛉	枕	源氏	和泉	紫日	更級	合計
抽象的關係	1	1	1	10	25	3	22	122	2	10	6	203
こと・もの	1	1	1	6	13		19	22		6	1	70
様相				3	3			37		1		44
時				1	2			9			1	13
空間・場所					5	3	3	19	2	1	3	36
形象								5				5
程度・限度					2			30		2	1	35
人間活動の主体	0	0	0	3	7	0	3	11	0	3	0	27
人間活動	0	0	0	2	7	0	2	31	0	0	0	42
心・声など					5			14				19
目動・名							1	1				2
芸術・文芸				1	2			11				14
習俗・遊樂				1			1	5				2
行動・様子												0
生産物・物品	0	0	0	0	12	1	2	7	0	0	0	22
物品・調度品					10	1	1	4				16
衣服								2				2
住居							1	1				2
乗り物					2							2
自然・自然現象	0	0	0	0	14	1	3	8	0		0	27
天地					4			1		1		6
植物					9	1	2	3				15
動物					1							1
光・色							1					1
音・香								4				4
合計	1	1	1	15	65	5	32	179	2	14	6	321
総用例数	1	2	2	63	153	46	419	537	18	45	26	1,312

まず、各々の文献によって連体用法としての割合の差が大きいことがわかる。『宇津保物語』(以下『宇津保』と略す)40%以上、『源氏物語』『紫式部日記』(以下『源氏』『紫式部』と略す)30%以上、『落窪物語』『更級日記』(以下『落窪』『更級』と略す)においては約23%を占めて、特に、『宇津保』『源氏』においては連体用法としての用法が多く用いられていること、『枕草子』(以下『枕』と略す)が7.6%に過ぎないことが目立つ。

次に、「をかし」の被修飾語の内容を見ると、「をかし」の初出である『竹取』を初め『土佐』までの平安前期の用例においては抽象的關係の用例のみである。

- (1) 「をかしきことにもあるかな。」〈竹取・十四・83.4〉
- (2) 女車のありけるに、とかくをかしきことなどいひつきて、〈伊勢・異四・236.11〉
- (3) 驚きて、「いとをかしきことかな。よみてむやは。よみつべくは、早いへかし」  
〈土佐・二・37.5〉

このように、「をかし」の『土佐』まで早い時期の連体修飾用法はすべて抽象的關係に限っていること、しかも、抽象的關係の中でも形式名詞「こと」を連体修飾していることが分かる。形式名詞「もの」も合わせて、「こと・もの」のような形式名詞を連体修飾する用例の多いことは、中世における連体修飾用法との関係からも興味深い。これは「をかしきこと」という表現が、「をかし」が姿を見せる早い時期からすでに固定化した表現として使われていたことを示すと考えられる。

- (4) 「いとをかしき君ぞかし。うち語らひて」〈落窪・卷二・127.5〉
- (5) 「この御昔人は、志賀の山もと、比叡辻のわたりに、いとをかしき山里侍り、そこにこそ、年ごろものせらるなれ。〈宇津保・国議、上・629.2〉
- (6) ほどなき相、人よりは黒う染めて、黒き汗衫、萱草の袴など着たるも、をかしき姿なり。〈源氏・葵・2・53.14〉

しかし、以後は(4)の例のように人間活動の主体・人間活動のほうへも用法が広がり、『宇津保』に至っては物品・自然の項目まで用法が拡張したと見られる。『源氏』に至っては用例数も多く、抽象的關係全般に渡って幅広く用いられていることが分かる。例の(6)は形象に分類されるもので、『源氏』にのみ見える。このように「をかし」の連体用法は、一時幅広い連体修飾語として使われたが、『源氏』以後逆に用法の縮小に傾いた。人間活動に関する項目の用例が『源氏』以後の文献においては見当たらないので判断しがたいけれども、中世の院政期の文献における用法と連体用法以外の対象分析から考えると、人間活動に関する連体用法はその用法が極めて弱くなり、人間活動の主体に限定されるようになったかと思われる。

また、人間活動の項目のうち、言動・名に対しては『源氏』1例だけ、行動・様子に対しては用例がまったく見られないことが注目される。自然・自然現象の意味項目では、主に天地と植物が「をかし」の被修飾語として用いられている。

## 2.1.2 連用用法

「をかし」が用言を修飾する連用用法の面から、平安時代の「をかし」の性格を検討することにする。「をかし」の修飾する用言を大きく自動詞と他動詞に分けて考えることが出来る。

連用用法の対象用例数は243例であり、自動詞と他動詞は各々143例と100例である。自動詞のほうがやや多い。ジャンル別に見ると、日記類においては、『蜻蛉』16例：1例、『和泉』1例：0、『紫式部』4例：1例、『更級』3例：1例になっている。日記類においては自動詞のほうが他動詞よりも「をかし」の連用修飾語として好まれているように見られる。『枕』も24例：10例として同じである。しかし、物語類においては、逆の傾向が伺われる。『落窪』では4例：10例になって、他動詞を修飾する用法のほうが却って多い。また『源氏』においては75例：65例として自動詞のほうが優位を占めてはいるものの、他動詞のほうも決して少なくない。

(7) 君はしたには少しをかしく思ふ事あれど、(落窪・卷三・197.9)

(8) 「いかがは。琴の弾かまほしければ。念じてやおはせむずる。みそかにはおはせかし。この雛にもや聞かせじとする」とのたまへば、いとあはれにをかしうおぼえ給ひて、(宇津保・楼の上、上・868.11)

(9) 鶺鴒舟ども、かがり火さしともしつつ、ひとかはさしいきたり。をかしく見ゆることかぎりなし。(蜻蛉・中・291.5)

(10) など、教へたらんやうに言ひつづく。あはれにもをかしくも聞くに、(源氏・手習・6-347.11)

(11) 若やかなる君達、今様歌うあたふも、舟にのりおほせたるを、若うをかしく聞こゆるに、(紫式部・55・249.2)

平安時代前期の『土佐』までの文献においては連用用法の例が見られないので分からないが、全体的な連用用法の用例から、『落窪』あたりの頃には他動詞類の下接が多く、次第に自動詞類の下接が増えつつあったとも解釈されるのではないかと思われる。「をかし」の用例の分析結果を表にして示すと、【表2】のようになる。(似た意味に分類されるものは「類」にまとめ、頻度順に示す。但し、2例以下のものはその他として処理する。( )の中はパーセンテージである。)

【表2】連用用法における「をかし」の被修飾用言

作品 用言	竹 取	伊 勢	土 佐	落 窪	宇 津	蜻 蛉	枕	源 氏	和 泉	紫 日	更 級	計
思う・感じる類				3(21,4)	3(10,7)	4(23,5)	7(20,6)	39(27,9)				56(23,0)
見る・見える類					1(3,6)	3(17,6)	10(29,4)	29(20,8)	1(100)	2(40,0)	2(50,0)	48(19,8)
ある類					7(25,0)	3(17,6)	5(14,7)	20(14,3)		1(20,0)		36(14,8)
動作・作用類				2(14,3)	1(3,6)		3(8,9)	12(8,6)				18(7,4)
す(為)				4(28,6)	5(17,8)		2(5,9)	3(2,1)				14(5,8)
聞く・聞える類						2(11,8)	1(2,9)	9(6,4)		1(20,0)		13(5,4)
書く・描く類					2(7,1)	1(5,9)		7(5,0)				10(4,1)
成る類					4(14,3)	2(11,8)		4(2,9)				10(4,1)
言う類				2(14,3)			1(2,9)	4(2,9)				7(2,9)
歌う類							4(11,8)	2(1,4)		1(20,0)		7(2,9)
弾く類				2(14,3)	1(3,6)		1(2,9)	3(2,1)				7(2,9)
吹く類								3(2,1)			1(25,0)	4(1,7)
舞う類				1(7,1)	1(3,6)							2(0,8)
着る類								2(1,4)				2(0,8)
震む類								2(1,4)				2(0,8)
その他					3(10,7)	2(11,8)		1(0,7)			1(25,0)	7(2,8)
計	0	0	0	14	28	17	34	140	1	5	4	243

【表2】と先ほどのような「をかし」の連用用法の用例検討を通して、次のようなことが大まかに言えるのではないかとと思われる。

第一に、[思う／感じる]類・[見る／見える]類・[聞く／聞こえる]類のような知覚動詞類が多いこと、情態性を受ける「ある」類の多いこと、「為成す」などのように「状態を表す語を伴ってその状態にする。」という意味を表す語が下接することから、時枝誠記によって指摘されている「主観客観の総合的表現の語」としての性格を見せていると思われる。すなわち、感情形容詞と属性形容詞との両方の性格をあわせもった、中間的なものの性格を表していると解釈される。情意性形容詞である「をかし」が状態性形容詞のような性格も表しているわけである。特に[思う／感じる]類・[見る／見える]類・[聞く／聞こえる]類のような感情作用の知覚動詞類が多いことは「をかし」の意味・用法を把握するのに大きな意味があると思われる。これは「をかし」の意味・用法の変化とも関わるものと思われる。

第二に、「す(為)」・「為成す」のような動詞が下接する「をかし」の用例は、人間活動と生産物・物品に関するものが多く、「滑稽」・「変だ」のような意味としては解釈されない。

第三に、連用用法として機能する「をかし」が243例(18.5%)になって、321例(24.5%)の連体用法の用例よりやや少ない。

### 2.1.3 叙述用法

ここでは、「をかし」が言い切りの終止用法及び中止法その他による二文接続の形式のものとして用いられている叙述用法について考察したい。各々の文献における「をかし」の叙述用法は次のとおりである<sup>6</sup>。

【表3】叙述用法としての「をかし」

用法 \ 作品	竹取	伊勢	土佐	落窪	宇津	蜻蛉	枕	源氏	和泉	紫日	更級
文末叙述	0	0	1	14	15	21	304	86	5	11	6
叙述	0	1	0	21	46	9	48	124	11	13	11
計	0	1	1	35	61	30	352	210	16	24	17

まず、「をかし」の文末叙述用法は、全体的に日記類において多く、物語類においては少ないことがわかる。これは日記類・物語類というジャンルの差によるものか、また「をかし」以外の他の感情形容詞においてもこのような傾向が見られるのか、よく分からないが、「をかし」の文末叙述用法は日記類・物語類というジャンルによってかなりの差があることは確かである。ちなみに、『枕』における「をかし」の文末叙述用法は304用例(72.6%)に及んでおり、二番目の『蜻蛉』21例(45.7%)とも大きな違いが見られる。これは『枕』における「をかし」の用法の大きな特徴にもなるだろう。

次に、文末叙述と叙述を合わせた叙述用法についてみることにする。

ジャンル別にみると、物語類においては、平安前期の作品においては約四割乃至五割の「をかし」が叙述用法としての機能を担っているわけであるが、平安後期の『源氏』は、210例(39.1%)になり、叙述用法としての「をかし」の割合が最も少ない。連体用法や連用用法のほうが叙述用法より好まれて使われている。日記類においては、『紫式部』が24例(53.3%)として日記類の中ではもっともこの用法の割合が少ないものの、五割を超える。『和泉』は全用例の約九割近くの用例がこの叙述用法として使用されており、『蜻蛉』『更級』のほうでも65%を超えている。そして『伊勢』では接続助詞「て」が接続した「声はをかしうてぞ、」という叙述用法が1例見られる。このように「をかし」の叙述用法は物語類と日記類という文体の差異をも反映しているように思われる。

さて、知覚動詞(半判断動詞)の多いことと関わる問題として、次のような点も考察してみる。

例えば、例の(7)「をかしく思ふ」は判断の内容を示す連用形で、意味上「をかしと思ふ」と言うのと同じである。このように「をかし+と+用言」という形として用いられている下接用言を分類してみると、大きく[思う/感じる]類(49例)・[見る/見える]

類(16例)・[聞く／聞こえる]類(8例)の動詞が下接語として使用されていることである。次に幾つかの例を示しておく。

(12) 中の君は、若き御心にをかしとおぼして、(落窪・卷二・159.9)

(13) 宮、「をかし」と思ほして、御返り聞こえ給ふ、(宇津保・沖つ白波・452.14)

(14) とあれば、折を過ぐしたまはぬををかしと思ふ。(和泉式部・4・95.11)

(15) 青摺の紙よくとりあへて、紛らはし書いたる濃墨、薄墨、草がちにうちまぜ乱れたるも、人のほどにつけてはをかしと御覧ず。(源氏・少女・3-57.12)

(16) よはひのほど同じまちは、をかしと見かはしたり。(紫式部・16・178.4)

(17) 道のほどを、をかしとも苦しとも見るに、(更級・29・351.8)

連用用法において著しい特徴になるこのような動詞が、叙述用法においても「と～」の形で下接する全ての用例の下接語として使用されて、情意性の表現の多いことが確認される。また、「ものわらひす」は、「をかし」の意味・用法において興味深い。意味の面では「滑稽だ・ばからしい」の意味領域に解釈され得るものである。(諸注釈書にも大体この意味として訳しており、『日本国語大辞典』(以下『日国』と略す)にも「ばからしい。つまらない」のブランチに載せてある。)その例を挙げておく。

(18) 「～。いつもよりなりけむ。我を、いかにをかしともの笑ひしたまふ心地に、月ごろ思しわたりつらむ」(源氏・蜻蛉・6-208.11)

しかし、「をかし」の叙述用法のうち、その内容全体を「と+用言」という形として受ける用法を考察したが、平安前期はもちろん『蜻蛉』に下るまで[見る]類の用例が全く見られない。また『源氏』以後の三つの作品においては[聞く]類の用例が見当たらない。これは「をかし」の用法上の問題であるかどうかよく分からない。しかしながらも、連用用法と関連して考えると、明らかに使用される動詞類の種類と用法の限定が見られると思われる。

#### 2.1.4 「をかし」の対象

ここでは、平安時代の「をかし」がどのようなことを対象に取るかについて論を進めたいと思う。「をかし」の対象に関する先行研究においては、各々の文献についての研究も少なく、主に『枕』『源氏』を対象に扱ったもので、平安時代全体の流れについて述べた論は見当たらない。「をかし」が意味分類のどの項目を対象とするかを表にして掲げる。

【表4】「をかし」の対象

作品 意味分類	竹 取	伊 勢	土 佐	落 窪	宇 津	蜻 蛉	枕	源 氏	和 泉	紫 日	更 級	合 計
抽象的關係	0	0	0	0	3(3.6)	1(2.3)	0	2(0.6)	0	1(3.0)	1	8(0.8)
こと・もの												0
様相					1	1		2				4
時					1					1	1	3
空間・場所					1							1
形 象												0
程度・限度												0
人間活動の主体	0	0	0	4(10)	16(19)	1(2.3)	17(4.4)	28(8.3)	1(5.6)	4(12.1)	0	71(7.4)
人間活動	1 (100)	2 (100)	2 (100)	31 (77.5)	43 (51.2)	20 (48.5)	234 (60.8)	227 (67.8)	14 (77.7)	19 (57.8)	2 (11.1)	595 (61.8)
心・声など		1		3	5	1	12	22		1	1	46
言動・名	1	1	1	6	9	9	44	28	1	1	1	102
芸術・文芸			1	9	8	3	43	61	11	8		144
習俗・遊楽				1	2	2	56	3				64
行動・様子				12	19	5	79	113	2	9		239
生産物・物品	0	0	0	4(10)	12(14.3)	2(4.6)	35(9.1)	31(9.2)	1(5.6)	8(24.2)	1(5.6)	94(9.8)
物品・調度品				2	3		6	11		1	1	24
衣服					2	1	12	7	1	4		27
住居				2	6		11	13		3		35
乗り物					1	1	6					8
自然・自然現象	0	0	0	1(2.5)	10(11.9)	19(44.2)	88(25.4)	48(14.3)	2(11.1)	1(3.0)	14(77.8)	193(20)
天 地				1	4	11	35	32		1	11	95
植 物					6	6	37	12	2		2	65
動 物						2	26	4			1	33
光・色												
その他							2(0.5)					2(0.2)
合 計	1	2	2	40	84	43	386	336	18	33	18	963

「をかし」の対象は、抽象的關係については最も少なく、人間活動に関する対象が最も用例が豊富であることが分かる。その内容についてより詳細に見ていこうと思う。

抽象的關係については、最も用例数も少なく、ごく限られた意味項目にしか用いられていない。『宇津保』のあたりによりやく姿を見せるが、その後にもこれに関する用例はわずかである。「をかし」の連体修飾用法とは対照的である。抽象的關係に関する対象は、「をかし」の連体修飾用法によって主に表現され、「をかし」と評価する場合には希に使われてはいるものの、連体修飾用法との役割分担がはっきりしていると見られる。

次に、人間活動についてみると、用例数の多いことは勿論、すべての文献に見える。心・声などから行動・様子にいたるまで人間活動一般に関するあらゆる意味項目に幅広く多用されている。人間活動の中でも行動・様子、芸術・文芸、言動・名という三つの意味項目に集中される傾向がみられ、特に行動・様子についての用例数は最も目立つ特徴になる。文献の上からは平安前期の『落窪』あたりからその用例が見える。



また芸術・文芸は『土佐』から、心・声などは『伊勢』から使われている。言動・名に関するものは用例こそ芸術・文芸と行動・様子より少ないが、すべての文献に用いられており、人間活動についての最も早い例として姿を現している。

第三に、人間活動の主体すなわち人は、「をかし」の被修飾成分の内容と同じく、『落窪』あたりから「をかし」の対象として用いられている。平安前期の『落窪』『宇津保』では人間活動に続いて多数用いられている。

第四に、生産物及び物品では、文献によって差はあるが、物品・衣服・住居が似た分布を示すことが分かる。

第五に、自然及び自然現象については、平安後期に至ると、人間活動に続いて多く用いられているけれども、作品によっても差が見られる。『更級』のように14例(77.8%)も使用されているものもあれば、『紫式部』のように1例(3.0%)しか現れていないものもある。『更級』の場合はやや例外的であるとみるべきで、「をかし」の現れ方を見ると、殆どが自然の景色・情景に集中しているという顕著な特徴を見出すことが出来るので、作品の性格によるものであると判断し得る。しかし、『紫式部』の場合はどうであろうか。『蜻蛉』『源氏』をも合わせて考えると、人間活動に関する用例は多用されるが、逆に自然及び自然現象についての用例は『源氏』以後においては傾向として減少傾向を強めているように思われる。

### 3. 「をかし」の意味

ここでは、「中古」における「をかし」の意味について考えてみることにする。

「をかし」は動詞「をく」(招く)から派生したとする見方が一般的であるが、その語源については諸説があつて一概に規定できない。また「をかし」は様々な意味領域を担っている多義語にも関わらず、その意味拡張と過程に関してはあまり研究されていないし、プラス評価の意味のみ注目されている。しかし、いわゆるプラス評価の意味の中でもどのような意味領域でどのくらい使用されているのかは分からない。以下、このような点に関していささかの考察を試みることにしたい。

まず、「をかし」の意味領域は辞典類などの記述を踏まえて、次のように①から⑥までの意味領域別に再分類して考える。

- ①「興味がひかれる、面白い、心がひかれる、興味がある、興味深い、感興がわく」  
「魅力的である、可愛い、可愛らしい、愛らしい」
- ②「趣がある、風情がある、情趣がある、風流だ、風雅だ」「美しい、優美だ、きれいだ」「すばらしい、立派だ、すぐれている、みごとである、結構だ」

③「好ましい、望ましい、よい」

④「楽しい、うれしい、快い、気持ちがよい、愉快だ」

⑤「面白くてつい笑いがこぼれる感じだ、おもしろおかしい、滑稽だ」

⑥「変わっている、変だ、妙な、あやしい、おかしい」

「をかし」の全用例を上記のような意味領域に沿って分類し、その意味領域別の出現頻度を調査して表示すると次に掲げる【表5】のようになる。

【表5】「をかし」の意味領域

作品 意味領域	竹取	伊勢	土佐	落窪	宇津	蜻蛉	枕	源氏	和泉	紫日	更級
①	1	1	1	14(222)	44(288)	18(39.1)	129(30.8)	166(30.9)	5(27.8)	9(20.9)	9(34.6)
②	0	1	1	34(54)	88(56.2)	20(43.5)	211(50.4)	308(57.4)	6(33.3)	32(71.1)	16(61.5)
③	0	0	0	0	0	0	17(4.1)	8(1.5)	0	0	0
④	0	0	0	1	2(1.3)	0	14(3.3)	5(0.9)	7(38.9)	0	0
⑤	0	0	0	14(222)	11(7.2)	7(15.2)	19(4.5)	32(5.9)	0	4(8.9)	0
⑥	0	0	0	0	9(5.9)	0	2(0.5)	8(1.5)	0	0	1
①②	0	0	0	0	0	1	9(2.1)	8(1.5)	0	0	0
②③	0	0	0	0	1	0	2(0.5)	1	0	0	0
①②③	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
その他	0	0	0	0	0	0	16(3.8)	0	0	0	0
計	1	2	2	63	153	46	419	537	18	45	26

【表5】からは、まず、「をかし」の意味は主にプラス評価の意味として用いられていることが認められる。ここでは、「をかし」の意味がプラスの評価からマイナスの評価へ移行行くありさまに焦点を絞って見ていきたい。

平安時代の和文系の作品における「をかし」の意味分析を通じて次のようなことをその特徴として挙げるができると思う。

第一に、中古においては、①「興味がひかれる、面白い」「魅力的である、可愛い」類、②「趣がある、風流だ」「美しい、優美だ」「すばらしい、立派だ」類、③「好ましい、望ましい」類、④「楽しい、愉快だ」類のようなプラス評価の意味類が1159例(91.5%)として「をかし」の意味の中核を成していることが確認される。

第二に、プラス評価の意味類のなかでも、②「趣がある、風流だ」「美しい、優美だ」「すばらしい、立派だ」類が697例(53.1%)、①「興味がひかれる、面白い」「魅力的である、可愛い」類が396例(30.2%)になっていることから、この意味類の「をかし」が両柱のような使われ方をされていることが分かる。特に、②類は用例の五割以上も用いられるから、第一の意味として使用されていると見られる。

第三に、また中古においては、すべての文献においてプラス評価の意味類が主な意

味として用いられてはいるものの、わずかではあるが、⑤「おもしろおかしい、滑稽だ」類 87 例(6.6%)・⑥「変だ、あやしい」類 20 例(1.5%)のように、「滑稽だ」類あるいはマイナス評価としての「変だ」類の用例があることである。

第四に、平安前期の『落窪』あたりにおいてはすでに滑稽感の例が割合に多く目につき、『宇津保』からはマイナス評価としての「変だ」類の用例が初めて見えるようになったことについて注目すべきであろう。

第五に、⑤「おもしろおかしい、滑稽だ」類・⑥「変だ、あやしい」類は用法とも色々関わりを見せているが、対象の面からは人間活動に関するものが非常に多く、特に行動・様子に関するもの、言動・名に関するものが大半を占めている。

各々の文献の用例は紙面の関係上取り上げないが、プラス評価からマイナス評価の方へ変化・移行していく意味変遷過程についてみることにする<sup>9</sup>。

まず、平安前期の『竹取』『伊勢』『土佐』の用例から検討する。

「をかし」の初出例である『竹取』の用例は、例の(1)「をかしきことにもあるかな。」〈竹取・十四・83.4〉のように、①「興味がひかれる、面白い」の意味に解釈される。『日国』でもこの例を「感興をおぼえる。興味深い。」の初出としている。

『伊勢』には僅かに二つの用例がある。例の(2)「女車のありけるに、とかくをかしきことなどいひつきて、」〈伊勢・異四・236.11〉と「笛をいとおもしろく吹きて、声はをかしうてぞ、あはれにうたひける。」〈伊勢・65・188.10〉のような用例である。例の(2)は、『日国』では「上手で趣がある。気がきいている。風流である。」のプランチにこの意味の初出例として載せているが、男が女車に言い寄って女との話のやり取りをする場面に使われているので、①「興味がひかれる、面白い」の意味に解釈するのがより相応しいのではないかと思われる。もう 1 例は在原業平の声を形容するもので、②「情趣がある、風情がある」の意味領域を持つ「をかし」として用いられている。『古語大辞典』(以下『古語』と略す)でも「情趣がある。興趣に富んでいる。みごとである。」の意味領域の例として載せている。僅かこの二つの用例しか見当たらないわけであるが、これはこの作品が歌を中心とする歌物語であるという性格によるとと思われる。歌と「をかし」との関係については後述する。

『土佐』にも 2 例の「をかし」がある。例の(3)「驚きて、「いとをかしきことかな。よみてむやは。よみつべくは、早いへかし」〈土佐・二・37.5〉と「(歌)いとをかしかし。」〈土佐・二・35.15〉がそれである。二例ともに終助詞「かな」「かし」が下接しているので、用法のほうでも「をかし」の表現にも関わるが、意味の面では、例の(3)は童の意外な話(言動)に対する驚きと興味津津たる関心が文脈から見られるので①「面白

い」の意味に解釈する。もう一つの例は②「情趣がある、立派だ」の意味に分類される。

このように十世紀初めごろまでの文献には、まだマイナス評価の意味は見ることができない。しかし、平安前期の後半に至ると、『落窪』では「滑稽だ」の意味領域の「をかし」が 14 例(22.2%)にもなり、さらに『宇津保』においては「滑稽だ」の意味領域の「をかし」が 11 例(7.2%)・「変だ、おかしい」の意味領域の「をかし」が 9 例(5.9%)のようにながりの用例がマイナス評価の意味のほうに傾いている。このようなことから、マイナス評価の「変だ、おかしい」、「滑稽だ」の意味が徐々に増えつつあることが窺える。しかも、「変だ、おかしい」類・「滑稽だ」類の意味領域の「をかし」が増えていくプロセスにおいても、最初は「滑稽だ」類の「をかし」が「変だ、おかしい」類の「をかし」よりも多用されている。平安時代における「をかし」の意味は、プラス評価の意味の方が圧倒的に多く用いられているのに対し、「変だ、おかしい」・「滑稽だ」の意味領域の「をかし」が徐々に増加しつつあるということは、『落窪』 14 例(22.2%)・『宇津保』 20 例(13.1%)・『蜻蛉』 7 例(7.2%)・『枕』 21 例(5.4%)・『源氏』 40 例(7.4%)・『紫式部』 4 例(8.9%)・『更級』 1 例(3.8%)において確認できる。平安後期の作品のうち、『和泉』だけは「滑稽だ」、「変だ、おかしい」のような意味に解釈される用例が見当たらない。

それでは、⑤「滑稽だ」、⑥「変だ」のような意味領域に分類される「をかし」の用例を具体的に見ながらその対象・用法も見ていきたい。

(19) 少將うち笑ひて、「いかゞ見はなし侍らん」とて、たちて、曹司におはして見給へば、まだ臥し給へり。又、しれがましうをかしうて、(落窪・巻二・129.4)

(20) やむごとなくむつましう仕うまつり給ふ四人、狩衣に藁沓履きて、隠れ立ちたり。「をかし」と見て、(宇津保・国譲、下・806.5)

(21) 御帳の内外の辺を巡りて見給へば、蔵人の少將、直衣姿にて、壁代と御障子との狭間に立てり。「いとをかし」と見て、待ち奉り給ふに、(宇津保・国譲、下・806.7)

平安時代の「をかし」の意味については、すでに多くの考察があり、早くから『落窪』においては滑稽感のある例が割合に目につく作品であると指摘されていた。が、どのぐらいなのか、またどのような対象に「をかし」と感ずるのか、について論じた論文は見当たらない<sup>10</sup>。⑤「滑稽だ」の意味領域の「をかし」が 14 例(22.2%)も使用されていることは先ほど確認したわけであるが、その用法・対象についてみる。まず、用法の面では叙述用法 12 例(文末叙述 5 例／叙述 7 例)・連用用法 2 例(覚ゆ 1／思ふ 1)になる。またその対象は人の行動・様子に関するもの 5 例、話(言動)に関するもの 5 例、心に関するもの 2 例などになって、人の行動・様子及び話(言動)に関するものが殆ど

である。

例の(19)の「をかし」は人の行動・様子に関するものを対象にし、兵部少輔の馬鹿馬鹿しい様子に対する叙述が「をかし」として表現されている。この例は、道頼が自分の替え玉として兵部少輔と四の君とを結婚させようとする計画を持って、兵部少輔を訪ねた場面である。この兵部少輔は人づきあいのできない人間で、「面白の駒」とあだなをつけられていること、また「まだ臥し給へり。又、しれがましようをかしうて、」という文脈からただの滑稽ではなく、『日国』の「輕蔑の笑いをおぼえるさまである。見ぐるしい。聞きぐるしい。ばからしい。つまらない。つたない。」の意味に属する「をかし」である。諸注釈書も滑稽の「をかし」とする。

『宇津保』においては、「滑稽だ」類の「をかし」だけでなく、例(20)・例(21)のごとく「変だ・あやしい」類のような意味領域に分類される「をかし」の例も散見する。(20)と(21)は、女二の宮略奪の計画と仲忠の機転が光る場面における用例で、明らかに「変だ」の意味としての「をかし」である。例(20)は、仲忠は祐澄と近澄が何かたくらんでいると思い、先回りし急いで兼雅邸に入って見ると、退出した女二の宮を途中に奪い取るために、駿足の馬を用意し、待ち伏せしている四人の服装と姿・様子を怪しく思う場面である。また例(21)は、(20)に続く場面で、仲忠が寝殿の方に行ったところ、蔵人の少將近澄が立ち隠れている様子を怪しく思う場面である。『日本古典文学大系』の頭注では「変な事をする」となどと注する。「変だ・あやしい」類の「をかし」の例は少ないけれども、このような意味の用例が出てくることは事実であり、初めて見られるのが注目される。が、先行研究においては、「をかし」の用例の多く出る作品としては指摘されたものの、それ以外については何の記述もない。例えば、辞書類の「をかし」の項目を見れば、分かるように、「滑稽だ」類・「変だ・あやしい」類のような意味ブランチに載せている「をかし」の用例として、『宇津保』の例は見当たらない。「をかし」の項目を載せている幾つかの辞書を見ると、『日国』：「滑稽だ」類の意味ブランチー『蜻蛉』が初出例／「変だ」類の意味ブランチー『今昔』が初出例・『古語』：「滑稽だ」類の意味ブランチー『源氏』が初出例／「変だ」類の意味ブランチー『今昔』が初出例・『岩波古語辞典』：「滑稽だ」類の意味ブランチー『蜻蛉』が初出例／「変だ」類の意味ブランチー『今昔』が初出例』のように、「滑稽だ」類の意味ブランチーでは『蜻蛉』や『源氏』を初出例として、「変だ」類の意味ブランチーでは『今昔』を初出例として挙げている。その他の辞書では「滑稽だ」類の意味ブランチーだけのものもあり、両方の意味ブランチーを立てないものもある。

このように辞書及び先行研究においては、『宇津保』の「をかし」の用例についてあ

まり注意しなかったことが見られる。「滑稽だ」類の初出例として『蜻蛉』を挙げたのは『宇津保』の成立年代の問題もあるので、難しいと思われるが、「変だ」類の意味プランチの初出例として院政期の『今昔』を挙げているのは問題である。

さらに、『蜻蛉』においては歌の中に「をかし」が見えるものもある。卷末歌集に2例の用例が現れる。歌と関係があるそれらの用例を以下に示す。

(22) つれづれのながめのうちにそそくらむことのすぢこそをかしかりけれ (蜻蛉・上・159.1)

(23) 陸奥のちかの島にて見ましかばいかに躑躅のをかしからまし (蜻蛉・卷末歌集・397.1)

(24) 陸奥国に、をかしりけるところどころを、絵にかきて、持てのぼりて見せたまひければ、(蜻蛉・卷末歌集・396.14)

(22)と(23)の「をかし」は、歌に出る例であり、(24)は詞書に見える「をかし」であるが、これらを見て分かるように、歌に出てくる「をかし」は「滑稽だ」・「変だ・妙な」の意味には取りにくい。

歌の「をかし」と関連して「をかし」の性格を見ると、歌と「をかし」の関係については、根来(1980)<sup>11</sup>が詳しい。結論的には「結局和歌の抒情の世界とそれを批評する知性的な「をかし」のそれとは別であって、このような「をかし」は和歌の抒情的性格と相反し、抒情的和歌の内容とはなりがたいものであった。これが「をかし」が和歌に現れない大きな理由であるとわたくしは考えをつけている。」のように述べている。しかし、このような説明に対して森野(1985)においては、「しかし、そうだとすると、ことは和歌の根源にかかわって、勅撰集以外に勘(勘)いとはいえ、「をかし」の例が存することの理由を積極的に解き明かすのが苦しくなるだろう。なによりも、「をかし」は、『万葉集』にも用いられていない、歴史の浅い、いわゆるただ言と意識されていたのではなからうか。」という批判もある。

『源氏』においても、用例の割合は少ないものの、「滑稽だ」、「変だ・あやしい」の意味領域に分類される「をかし」の用例が多く見られる。先に挙げた例の(18)と以下の例(25)がそれである。例(25)は、源氏と典侍との逢瀬を頭中将が脅す場面の例で、源氏がふと物音を聞き、典侍に通っている修理大夫だと思い込んで屏風の後ろに慌てて姿を隠す行動の滑稽味である。

例(26)の『紫式部』のような「をかし」は、女房の裸姿についての評である。十二月三十日、鬼やらいの儀式の後、晦日の夜の宮中の追いはぎ事件で女房二人が着物を奪われた事件が起こり、裸姿で叫ぶ大騒ぎになった。その事件のおかしさから「をか

し」と発している。「変だ、妙な、あやしい」のような意味にも取れるが、前の「おそろしきものから、」という文脈を考えると、「滑稽」類の意味に解釈するのがよりよいのではないかと思われる。

また、『更級』における「をかし」は、上洛の旅、家居の記、宮仕えの記、物語での記において多く用いられており、主に自然を対象にしている。さらに自然を対象にしながらか人事には希に用いられている特徴のため、「をかし」の意味領域は「面白い、心がひかれる」類の意味領域と「趣がある、風情がある」類の意味領域に焦点が当てられて、マイナス評価の意味を担う「をかし」は 1 例に留まる結果になったと見受けられる。例の(27)がそれである。賤しい二人の男たちがその夜一晩中、寝もせずに出たり入ったりして歩き回るので、その理由を聞いたところ、「大事な釜が盗まれるのを恐れて一晩中歩き回る」と返事した。その賤しい男の変な話と行動とに対する作者の感情が「をかし」で表現されている。

(25) 直衣ばかりを取りて、屏風の後に入りたまひぬ。中将をかしきを念じて、引きたてたまへる屏風のもとに寄りて、こぼこぼと畳み寄せて、おどろおどろしく騒がすに、(源氏・紅葉賀・1-413.15)

(26) 朔日の装束はとらざりければ、さりげもなくてあれど、はだか姿が忘れず、おそろしきものから、をかしうともいはず。(紫式部・44・223.9)

(27) と問ふなれば、「いなや、心も知らぬ人を宿したてまつりて、釜はしもひきぬかれなば、いかにすべきぞと思ひて、え寝でまはりありくぞかし」と、寝たると思ひていふ、聞くに、いとむくむくしくをかし。(更級・27・347.4)

#### 4. おわりに

以上のように、中古の和文系の文献における多義語「をかし」の意味・用法について考察し、中古の「をかし」の意味・用法は如何なるものであるかを述べた。中古和文系の文献における「をかし」は、その機能・対象の検討からいくつかの特徴が浮き彫りになった。意味の面においても何が主な意味領域かが明らかになり、その意味変遷の過程からも注目される。今回の調査は中古和文系の文献に限ったものであるが、通時的研究の観点からも、中古、院政期、鎌倉時代、室町時代におけるその意味用法の変化のありさま、さらに「おもしろし」などの類義語との相関関係もより厳密に検討すべきであろう。これらの問題は今後の課題として後稿を期したい。

<sup>1</sup> この考え方は、細川英雄(1992)「感情形容詞研究の一視点—『万葉集』に見える「かなし」の意味分析から—」(『辻村敏樹教授古稀記念日本語史の諸問題』明治書院)に倣った。連体用法=体言を修飾する形式のもの、連用用法=用言を修飾する形式のもの、叙述用法=言い切りの終止用法及び中止法その他による二文接続の形式のものを指す。

<sup>2</sup> 『更級日記』の連体形の活用形は全用例の46.2%になるが、被修飾語の内容が示されていないものが半分を占める。

<sup>3</sup> その他、『竹取物語』『伊勢物語』『土佐日記』『蜻蛉日記』『和泉式部日記』の文献名は、以下『竹取』『伊勢』『土佐』『蜻蛉』『和泉式部』のように略称する。

<sup>4</sup> 中世においては、時代が下るにつれて「こと」の著しい増加が見られる。黄 龍夏(2000)「をかし」の意味・用法に関する研究—『枕草子』を中心に—(東京都立大学修士論文)を参照されたい。

<sup>5</sup> 根来司(1969)『平安女流文学の文章の研究』においては、「枕草子の「をかし」で対象語がガ格をとるところの「をかしおぼゆ」(あるいは「をかしく見ゆ」「をかしく聞ゆ」)の例はいくらかも見えるけれども、ヲ格をとるところの「をかしく思ふ」の例は皆無であることが知れるのである。(中略)このことは「をかし」だけでなくこれについて多い「めでたし」「にくし」などについてもいえるのであって、」(p.37)として、一般に格助詞「を」のつく文節は形容詞にかからないと述べている。しかし、『源氏物語』では、他動詞「思う」1例・「ご覧す」1例・「思す」1例がヲ格をとる。かくとりあへず思ひよりたまへるゆゑゆゑさなどを、をかしくご覧す。『源氏・少女』3-76.9)

<sup>6</sup> 叙述用法は、「をかし。」のような句読点が施しているものや引用文の終わりにある用例は文末叙述と呼び、その他のものは叙述と呼んで一応区別することにする。文末叙述の用例には「見ゆ」「覚ゆ」「聞こゆ」などのような動詞が下接して終止するもの、「をかし」という評価を弱めたものとみて文末叙述の例に入れて考えたい。

<sup>7</sup> 自然・自然現象に属する音・香は、動物と植物にそれぞれ入れた。また「をかし」と評価するものを対象とし、いわゆる説明的なものは分析から除外した。連体修飾語として機能する用例のうち、形式名詞こと・ものも対象の分析に入れて考える。表では抽象的關係などより大きな意味分類項目別に小計を書き、( )の中にその割合を示す。

<sup>8</sup> 表の中の「その他」という項目は、重複意味の「をかし」のうち表に載せられなかったものをまとめて指す。また①②などは複数の意味に解釈されるものである。さらに用例1以下のパーセンテージは省略する。

<sup>9</sup> 各々の文献に関する詳しい用例は黄 龍夏(2000)を参照されたい。

<sup>10</sup> 森野宗明(1985)「形容語の変遷」『日本語学』第4巻2号

<sup>11</sup> 根来 司(1980)「をかし」と歌系列、文系列『国語語彙史の研究—』(根来 司(1988)『王朝女流文学のことばと文体』に再録)、さらにここには、歌判詞としての「をかし」に関する論もある。

## 参考文献

岡崎義恵(1938)「をかし」の考察『日本文学論攷』文学社

国立国語研究所報告(1964)『分類語彙表』秀英出版

(1972)『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版

小林賢次(1993)「古代語の語彙・語彙史」『日本語要説』ひつじ書房

築島 裕(1987)『平安時代の国語』東京堂出版



- 土屋博映(1976)「枕草子の「をかし」と「あはれなり」—情景と動植物の描写から」  
『佐伯祐夫博士百年記念国語学論集』表現社
- (1979)「枕草子の美的理念語—「あはれなり」「をかし」「めでたし」を中心として—」中田祝夫博士功績記念『国語学論集』勉誠社
- 根来 司(1969)『平安女流文学の文章の研究』笠間書院
- (1973)『平安女流文学の文章の研究続編』笠間書院
- (1980)「『をかし』と歌系列・文系列」『国語語彙史の研究』和泉書院
- 平澤洋一(1986)「枕草子と情緒性の意味素性」『国語語彙史の研究 七』和泉書院
- (1988)『枕草子と意味の構造』城西大学学術叢書5 城西大学女子短期大学部
- (1996)『日本語語彙の研究』武蔵野書院
- 森田良行(1996)『意味分析の方法—理論と実践』ひつじ書房
- 森野宗明(1985)「形容語の変遷」『日本語学』第4巻2号
- 山崎良幸(1978)『源氏物語の語義の研究』風間書房

### 【資料】

『竹取物語』(1例)『伊勢物語』(2例)『土佐日記』(2例)『落窪物語』(63例)〈松尾聰校注『落窪物語 堤中納言物語』『宇津保物語』(153例)〈室城秀之(1995)『うつほ物語全』『蜻蛉日記』(46例)『枕草子』(419例)〈池田亀鑑(1973)『全講枕草子』『源氏物語』(537例)『和泉式部日記』(18例)『紫式部日記』(45例)『更級日記』(26例) (用例の調査底本は、〈〉に記した以外は小学館の日本古典文学全集による。『宇津保物語』までを平安前期、『蜻蛉日記』からを平安後期の資料として扱う。)

(ファン ヨンハ・東京都立大学大学院生)